

## 丸山眞男を中国で読む

講師 孫 歌

みなさん、こんにちば。ご紹介にあずかりました孫歌でございます。個人的な話から始めまして恐縮ですが、今から十年前に私は丸山眞男について最初の論文を書きました。その時に、丸山眞男の一本の論文に惹かれました。それは、おそらく皆さんにもおなじみだろうと思いますけれども、「肉体文学から肉体政治まで」という論文でした。この論文に接して、私は非常に示唆を受けました。当時において、私にとってもっとも感銘が深かったところは、実体としての文学と実体としての政治のあり方に対する丸山眞男の猛烈な批判的態度です。この論文が書かれたのは、一九四九年、丸山眞男がまだ若い時でした。しかし、すでにこの論文の中で、彼の生涯の基本的な輪郭が描かれたと思います。それは、フィクションということばで表現される媒介された現実と直接に認知された現実の対立、それに対する彼の多彩な思想的な構造ということです。そして当時、私はフィクションということばを受けとめた時、その中身つまり媒介された現実ということばが一

体何を指しているかについて、それほど研究しませんでした。むしろ、その反対側に立たされた実体の精神、実体としての思想、実体としての政治、それから実体としての伝統という考え方に注目しました。なぜ自分の視点をこう決めたかといいますと、ちょうどそのとき、一九八八年頃に中国社会はいわゆる市場経済化が進んでいて、もうすでに挫折しはじめた段階に当たりました。そして、このような社会環境の中で、いかに当時の中国政治を考えるべきか、そしていかにそれまでのいわゆる社会主義社会の実践を受けとめるかということが大問題になっていくわけです。当時中国の知の世界は、ちょうど分化しはじめた、つまりいろいろな思想的な対立が顕著になっていた時期でもあります。その対立というのは、当時の知識界では、新左翼とリベラリズムの対立というふうに総括されました。一九九八年の時点は、天安門事件の十年後にあたって、その時に、中国の知識界には一種の暗黙の約束が基本的な知の場として形成されつつありました。思想と学問を

分離しよう、学問と政治を分けようという発想法自体は非常に流行っておりまして、この発想法の下で、純粹な学問というのは緊張感を失いながらすばやく主要な地位を占めはじめました。ですから、その時に丸山眞男のフィクション論に接しまして、私はいろいろな問題を考えさせられました。もし、私たちは思想と学問、そして学問と政治をそれぞれに独立した実体として考えれば、たしかにそれらを対立させることが可能になります。ところがもし、丸山の指摘したとおりに、機能として考えれば、そして媒介される現実として考えれば、おそらくそう簡単には分けられないでしょう。ですから、その時に私が丸山についての論文を書いた最大の理由は、中国の知の世界のあり方に対して、丸山を通して質疑したわけです。私の問い自体は、実はそれほど力強いものではありませんでした。むしろ、私の紹介した丸山眞男の視点、および彼の分析の方法自体は、中国の関心がある人たちに非常にインパクトを与えたと思います。

そして、それから八年も経ち、二年前になって私には思いもよらない出来事がありました。北京の十数人の若い研究者は——当時は彼らの大部分はまだ大学の博士課程の院生でした——私に訪ねてきました。彼らの出身校は北京大学、清華大学、北京師範大学、中国人民大など、その若いの専門分野は、基本的に歴史学、思想史、それから中国文学などです。この若い人たちはみずから集まりまして、私に頼みにきました。「一緒に丸山を読みませんか」と。こうして、彼らの要求に応じて私も彼らと一緒に勉強することに

決めまして、小さな読書会を形成しました。我々の使っているテキストは、——残念ながら、私以外の方々は今も全員日本語が分かりません。そして、彼らの専門自体も日本研究ではなく、すべて中国研究ですから、中国語に訳された丸山の限られたテキストしか使いません。そこでみんなが努力してテキストを捜し求め、探せば意外にいろいろなテキストが現れました。まず、台湾版の『現代政治の思想と行動』の翻訳があります。残念ながら、台湾の標準語と大陸の標準語はかなりちがいがありまして、非常に読みづらいテキストです。それから、大陸で出版された翻訳も二冊があります。王中江さんの訳された『日本政治思想史研究』、それから、丸山眞男の唯一の中国人の弟子の區建英さんが訳された『福沢諭吉と日本の近代化』。そして、後で見付かった海賊版の『日本の思想』の訳もありました。無いよりましですので、手に入ったものをすべて使って一緒に読みましょう、と、われわれは一緒に読むようになりました。この読書会がスタートした後、私は少し不思議に感じました。集まってきた若い研究者たちには、政治学が専門の人は一人もいません。私とそれほどつきあひもしておりませんので、彼らがいっただいどのような研究をやっているかは私にもよく分かりません。しかし、私たちはまず『日本の思想』という海賊版を使いまして、その中の四本の論文と一緒に読んでいったのですが、彼らは熱烈に反応しました。正直に言いますと、海賊版の誤訳はかなりひどいです。毎回時間を使って、私はまず訂正しなければなりません。それにもかかわらず、彼らは情熱をもって読みつけました。その次に

は『現代政治の思想と行動』を一緒に読みましたが、この台湾標準語も大変なものでした。それにしても、みな非常に興味を示したので。そして私は、「あなたがたはなぜ丸山眞男に興味を覚えているのでしょうか？」と聞きました。彼らはこう答えたのです。「私たちは、学問の世界でやってきたのですが、いかにして思想的に学問的に分析するかどうかということは教えられませんでした。ですから、一つの大きな問題を細かく分解して、分解しながら深めていくというプロセスは今まで知りませんでした。丸山からそういうことを学びました」。この反応から私は非常に示唆を受けて、一つの謎が解けたような気がします。私はずっと、丸山をどのように中国で読むべきかということに悩んできました。丸山はご存知のように中国研究者ではありません。彼の著書の中で中国について言及された部分はごくわずかで、どちらかといえばそれほど重要な観点を出していませんでした。ですから、もし中国研究の中で丸山を活かそうとすれば、恐らく収穫はそれほど大きいわけではありません。だとすれば、どのように丸山を中国で読むべきでしょうか。私は丸山に接したとき、個人的に非常に示唆を受けました。私は日本思想史研究者ですので、もし中国研究の人たちに自分の収穫を伝えようとすれば、どのような手続きが必要なのでしょう。これこそ私のずっと悩んできた問題です。若い人たちと一緒に読書しながら、私は徐々に手がたえが得られました。違う読み方があるんだ、ということを私は痛感しました。丸山眞男には多彩な業績があります。日本政治思想史研究、政治学、それから状況的な発言。いろいろな位

相で彼は優れたテキストを残しました。どの部分をどう受け継いでわれわれの知的栄養にするかというのは、おそらくそう簡単に答えが得られないことです。私がいま読書会を通じて得た一つの答えは、丸山の政治学の部分、つまり彼が夜店として、どちらかといえば自分としてはあえて軽く扱うような部分を、中国でまったく日本研究をやっていない人たちと共有できる、ということ。どうしてこの共有ができるかといいますと、おそらく丸山の仕事の特徴と関係があると思います。たとえば、丸山の『現代政治の思想と行動』という著書を読めば、みなさんも私と同感するかもしれません。彼はこの本の中で、基本的に状況的な発言をしました。しかし、よくよく読めば、意外にもリアルな状況そのものが含まれていません。ところが、それほどリアルな形で状況を言及していない丸山の「状況的発言」自体は、空理空論の学問ではありませんでした。おそらく、そういう意味において、一時的に彼は思想家でもなく学者でもないといわれたこともありました。しかし、北京での実験を通して、私はむしろ正反対の結論を得ました。まさにこのような特質によって、丸山は広く共有できるようになります。彼は、あえて状況の現象面との間に断絶を作ります。その断絶によって、自分の論じている政治学の状況的な問題を普遍的な問題に転じさせようとした。もちろん、ただ「断絶」によって普遍化するということではありません。手続きはもっと複雑です。丸山の政治学の視野の中で、政治学の基本的な問題が彼特有の「状況感覚」という位相において再構成されていました。その際構成された政治的

問題は、むしろ今日の中国の政治状況の中でも重要な認識論の問題として生きているわけです。特に指摘すべきは、欧米の政治学の理論の中で、このような位相を見いだすことは意外に難しいのです。つまり、丸山政治学と同じような仕事は、むしろ欧米の政治学研究者はやっていないわけです。そういう意味において、私たちは違う形で丸山眞男の政治学の視点を生かす仕方を模索してきました。

具体的にどうということかといいますと、たとえば丸山の政治状況感覚から、私たちは政治を社会生活の中でどのように把握すべきかということを学びました。中国社会では非常に長い間、上から下まで、下から上までの政治システムはイデオロギーによって作られてきました。そして、文革の終わりをきっかけにして社会は激しく変動しました。政治を悪いものとして見る習慣が定着しました。特に天安門事件以降、政治から独立しようという動きがなぜ思想界の中でかなり主流になっていったかという点、政治を権力闘争の一番悪質な場とする考え方が社会の生活の中に根ざしているわけです。しかし、丸山の一連の論文を読んでいる間に、個人の政治的責任から政治社会のメカニズムを解明するという彼の視座を私たちは受け止めました。そして、政治と道徳を区別し、そして両立させるという形で、悪さ加減という視座から政治を見る。そこから、結果責任としての政治的な選択という問題を個人の位相で考える。それから、政治を芸術（アート）として理解するという、中国の普通の市民にとってあまりなじみのないテーマも、私たちは面白く読みました。もちろん、具体的に展開すればま

だいろいろな要点もありますけれども、要するに丸山眞男の政治状況感覚自体は、あくまでも私たちは個人として現代社会の中でいかに政治的な選択をするかという問題を考えさせられました。

それからもう一つ、重要な発見がありました。私たちが一緒に『現代政治の思想と行動』を読んでいたときに、若い研究者たちはその第二部、つまり「イデオロギーの政治学」に対して非常に強い興味を示しました。ちなみに、この部分は、アメリカで英語に訳されたときにほぼカットされました。ところで、私たちが一緒に読んでいたときに、第一部の日本の政治社会に対する分析、そして第三部の政治そのもののあり方と限界についての分析は、参加者たちは政治学の基本的なテーマとして受け止めたのに対して、第二部を読むときに参加者たちはあくまでも自分の問題として受け止めました。なぜかという点、この部分の中のをあわせて三本の論文は、ソ連の社会主義の実験について言及していました。なかでも特に二本の論文は、ラスキの著作を紹介する形で、どのようにリベラリストとして共産圏の中の社会主義の実践を理解するかという問題がとりあげられました。もちろん、このような論文は、この本以外にもかなりあります。たとえば、「三たび平和について」は、冷戦に関しての丸山の代表的な論文の一つです。しかし、中国語に訳されていませんので、あくまでもこの本の中のこの部分を一緒に読むことに止まります。若い人たちの反応は、非常に興味深いものでした。「私たちは文革までの中国の実践、あるいは実験を経験したことがあります。しかし、その歴史は私たちの現在と直接

につながっています。そして、丸山のラスキ論を通して、私たちは今までになかった視点を身に付けました。それは、丸山のことばで、あるいは丸山がラスキから借りたことばで言えば、「ほめたりけなしたりする前に、まずそれを理解しよう」ということです。自分の歴史ですから当然自分はその主人公だ、というわけではありません。むしろ、それを判断する前に、まずそれを理解しなければならない。若い人たちは、そこから丸山のラスキに関する論文に入りました。

この論文のなかでは、実はたぐさんの問題があつかわれておりまして、とてもここで紹介する余裕がありませんけれども、簡単に言いますと、おそらく二点は、いずれもラスキの論点ですけども、丸山はそれを紹介する形で強調しました。一つは、共産主義の実験を、あるいは共産主義を人類の一つの実験としてみる場合には、時間の要素を無視してはいけないということです。たとえば、アメリカで百五十年もかかった近代化というプロセスを、ソビエトでは三十年間で実現しました。このような凝縮された歴史の時間は、いかに現実の中で流れてきたのか。これが第一点です。そして第二点は、このような人類史上で今まででなかった実験は、さらに国際的な圧力の下で、いわゆる資本主義国家の外在的な圧力の下で行われまして、そして内部には文盲が国民の大多数を占めたというきびしい状況もあって、このようなきびしい近代化のプロセスを見るためには、まずそれを「理解」しなければならぬ。そして、もしさらにつけ加えるならば、丸山が特に強調したのは、資本主義と社会主義は、冷戦期にはまったく融合か両

立できないような、絶対的な善と悪という対立の構図の中で認識されました。しかし現実的には、決してそうではありません。丸山が強調したのは、これは「三たび平和について」の中で強調された問題ですけども、自由と平等はフランス大革命の時に手を携えて一緒に共存したけれども、その後の歴史の中で、実は最大限の政治的な自由を実現した国では決して平等は実現されていません。逆に、平等を図ろうとする国の中では、自由は犠牲にされました。この現象を結局どのように受けとめるか、そしてさらにいえば、どのように自由と平等を両立できるようにさせるか。それに丸山は答えたというよりも、彼はこの問題の深刻さを強調しました。そして私たちは、この論文を読んでいたときに、むしろ中国の一九四九年以来の歴史をもう一度考え直すようになりました。

たとえば、今年になって中国について皆さんがご関心をもたれたと思われる三つの事件がありました。ギョーザの問題、チベット問題、それから今進行中の地震の問題もあります。これらは今年の問題というより、それぞれに歴史的な問題でもあります。ですから、われわれが自分の歴史を認識する場合には、おそらくできあがった人権とか自由とかのキーワードによってその歴史を受けとめることはなかなか難しいのです。むしろ、丸山のラスキ論を通して私たちは、この自分のきびしい歴史に入るアプローチが得られたような気がします。

中国の一九四九年以後の歴史は、決してロシア革命の歴史と同じものではありません。しかし、おそらくいくつかの点では非常に似たよ

うな要素が潜まれています。まず、中国は歴史上おそらく初めての近代の意味での統一国家として、一九四九年にスタートすると同時に、朝鮮戦争に巻き込まれました。そして、その時の中国は、共産党政権の下で近代化された軍隊をもっておりません。中国の軍隊は結局、朝鮮戦争をきっかけにソビエトによって武装されました。ですから、ソビエトの属国になるという選択肢が一つありました。それからもう一つ、ソ連と似たところがありまして、当時の中国も文盲の人口が圧倒的に多かったのです。このような国の中で、特に中国の場合にはロシアにはない要素がもう一つありました。歴史的に徐々に人口が増えてきて、非常に人口の多い国になりました。ですから、このような決して恵まれていない国の中で、中国には二つの選択肢がありました。一つは、ソビエトの属国になって、代わりに軍事化と工業化を実現してもらおうというのです。実は、北朝鮮はこの選択肢をとりました。もう一つの選択肢として、自力で軍事工業化と重工業化を実現することで、これはいわゆる自力で近代化するというプロセスでもありますが、しかしそうなれば、かなり大きな代償を払わなければなりません。その代償は、まさにロシア革命の時期の代償と同じようなものです。つまり、農業の集約化、そして消費物資の厳しい制限です。社会全体は、低いレベルの物質的な生活水準を保ちながら資源を集中して工業化と軍事工業化を実現する。この文脈の中で、中国の土地改革という農村の農業の集約化のプロセスが発生したのです。そして、ある程度基礎ができてから、五〇年代の後半から中国はソビエトから独立しよう

としまして、そこで中ソ対立が発生したのです。そのために、国内の普通の人たちはどれだけ犠牲を払わなければならないかという問題は、今でも問題として私たちは記憶しております。いわゆるチベット問題は、ある意味ではこの文脈で生じました。チベットで行われた改革は、実は中国全土の改革の一部でしかありません。そして、チベットでの改革は、どちらかといえばゆるやかな形で進行了ました。それは、土地改革です。この土地改革は、それまで僧侶の握っていた土地を暴力で奪って、使用権を農奴という農民たちに与えたというプロセスです。漢族の地域では、土地改革はほとんど一年間か二年間で完成しましたが、チベットでの同じような土地改革は十年近くかかりました。それにしても、おそらく文脈としては、中国はいかに統一国家として近代化を実現するかという大きな課題に関わっております。そして、文革が終わわり、毛沢東時代も終わる時までには、中国の軍事工業化と重工業化は実現しました。中国は近代国家になりました。その後、いわゆる改革開放という時期に入りまして、それまでの中国のたどり着いた、ある意味では非常に挫折しながら、膨大な犠牲を払いながらたどり着いた近代が、その後は市場経済化という形で外国の資本を入れて物質的に上昇させようとしたのです。ですから、いわゆるギョーザ事件はこの文脈で発生したのです。今年の初め頃に、みなさんがおそらくなじんだ言い方が一時的に毎日流されました。「中国製ギョーザ」。実はこの言い方自体はそれほど正確ではありません。たしかに中国で作られたギョーザです。しかしこのギョーザは、すべて日本に輸入するた

めに日本の会社がリードして中国で作ったギョーザです。中国人は食べません。食べようとしても食べられません。ですから、中国人はこのギョーザ事件に対してなぜあれだけ冷淡なのかというと、そもそもこれは中国の内部の問題ではなく、日本国内の問題として中国人は理解しております。

そういうことはともかくとして、私たちにここで見えてきたのは、市場経済化以降の中国社会の新しいシステムです。いわゆる世界の工場になった中国は、徐々に外国の資本を導入することによって社会的物質的な貧しさを改善しようとしたのです。ですから、貧富の差はこの段階で生じました。私たちはこの貧富の差とか、およびいろいろな社会的な不正に対して、もちろん批判的な目をもっていますが、問題はその根っこはどのような土壌に下ろしているのでしょうか。実は中国の知識界の中で、どちらかといえば市場経済化以降に、西側、特にアメリカのイデオロギーを自分の思考パターンにした時期がありました。アメリカ式の発想法(特に冷戦期のそれ)にとって中国社会のもっとも根本的な問題は言論の自由と人権の問題であり、体制と戦わなければならぬというように社会の認識が作られております。しかし、もし私たちが丸山のラスキについての文章の視座でもう一度この社会システムや歴史の経緯を見れば、この思考パターンは中国社会の基本的な状況には決して合っていないということがわかります。ですから、そこで西側のイデオロギーの内在化という状況をいかに突破するかという問題を、日本のリベラリストとしての丸山から、私たちは学びま

した。そしてそこから私たちは、一つの初歩的な問題意識を共有するようになります。中国社会をいかに政治社会にするか、という問題意識です。おそらく、中国社会ほど政治的でない社会はない、というような認識があると思います。それだけ政治的な統制を徹底的に貫徹して、今でも政治権力によって国をコントロールするというようなイメージは、ほとんど世界的に定着しております。私たちが、丸山を読むまでに多少はそういうふうに通じていました。しかし、丸山の政治的な視点を学ぶことによって、考え方が変わりました。もし、政治を实体として、変わらないできあいのものであるのではなく、それを常にフィクションとして、そして分解可能、再構築可能なプロセスとして考えれば、そしてその分解する責任は政府にあるだけではなく、一人ひとりの国民のところにあると考えれば、おそらくこの社会を政治社会にするために私たちがやらなければならない仕事がたくさんあると思います。そして、政治は政府に任せるというのではなく、私たちは個人的に、そしていろいろな連帯によって、つねに参与できるようにすれば、おそらく問題は違う展開になります。

ここで、簡単にいくつかの例をあげます。たとえば、カルフルーに対する抗議のデモがありました。これは今年のことでした。このデモの最中に、中国のある新聞紙にある評論を載せました。それはデモについて何もふれていません。ただ、一つの提案をしたのです。国民にストライキの権利を与えてくださいという。中国の憲法は、一九九〇年代つまり市場経済化してから、企業の従業員のストライキの権利を

保障しなくなりまして。それまで憲法にはそういう条文がありまして、普通の国民にはストライキの権利がありました。一九九〇年代に入ってから、それは消されました。カルフルに対するデモの中で、ストライキの権利を取り戻すという提案が出されたわけです。それから、今回の大地震の中で、四川省で最初から民衆たちは自主的にいろいろな位相での不正と腐敗を監視するようになりまして、四川省の政府からある時点で、市民の監視システムを作るといって臨時決定を出したのです。つまり、こういう形で市民の政治参加は制度化されるようになりました。ほかの例もあります。何年か前に、中国のある普通の農村幹部は、上訪という制度、つまり一番下層部から手紙を出して人民代表大会のある機関を通して、直接に國務院（日本の内閣に当たるところ）に社会の現実問題を反映するというシステムがありまして、この普通の農村幹部は、封筒に切手を貼って郵便ポストに手紙を入れることによつて、中央政府に農村問題についての注目をよびおこしました。しかし、それまでに彼は非常にいろいろ工夫したのです。この手紙はどのような書き出しで有効に目的を達成できるか、どの時期に投函すればいいかなど、いろいろ配慮して彼はその行為を成功させたわけですね。以上のいくつかの例はただの例だけで、実は中国の社会生活の中でこのような例は毎日のようにあらわれています。しかし、それが政治のプロセスとして認識されたことはほとんどありません。もし、私たちが自分の視座を変えて中国社会の新しい政治性を発見することになれば、おそらくもっと中国社会を政治社会にするということを実現しや

すくなるだろうと考えられます。

そしてもう一つの問題、これはおそらく現在のリアルな問題として進行しています。今回の四川の大地震で見られた中国の中央政府の役割、逆にいえば、統一国家としての自然災害を克服するというシステムの重要性は、非常に認識されました。自然災害が爆発するときに、もし規模が小さければ地域で克服できます。少なくともそれほど全国的に動員する必要はないかもしれないですけども、たとえば四川の大地震の場合には——この地震は今でもある意味ではまだ続いて、被害もまださらに続いているのですが——それをどのように克服するか、どのように犠牲を最小限に抑えるかということ、それほど簡単な問題ではないです。そこから、ある原理的な問題が生じるわけですね。中国というような地域の中で歴史的に形成されてきた一種の総合社会、そして近代になってから、あるいは一九四九年になってから統一国家として営まれてきた国、この国のシステムをいかに受けとめるか。つまり、この国をバラバラにする必要性と、この国を統一国家にする必要性を、それぞれに具体的な状況に即して考えなければなりません。それを抽象的に考える場合には、むしろこのような状況をそこなうてしまいます。ですから、私は今年よく考える問題が一つあります。もし丸山眞男が今でも健在であれば、彼は今日の中国に対して、どのようなにして、状況にそのまま癒着しないで、媒介された現実を作ることによつて、彼なりの政治的な発言をしようか。しかし、もう丸山本人からはこの問題に答えてくれません。しかし、彼の残された

著作の中に、その答えのヒントは十分に含まれていると思います。そのヒントを求めて、われわれなりに媒介される現実を作り出すというのは、私と私たちの読書会、それから丸山に対する興味がある中国の人々の、これからの課題になるだろうと私は信じております。一時間になりましたので、一応話はここまでにいたします。

以下、質疑

——孫歌先生、ありがとうございます。ちょっとご質問したいのですが、非常によく丸山眞男の神髓を今日的な問題で具体的に解説していただきまして、非常に示唆に富みました。日本のマスメディアの世論に対する影響力は非常に大きいわけです。日本人は非常に教養も高いのですが、それにもかかわらずマスメディアの影響力は強い。では、中国においては、マスメディアの中国の世論と知識人の関係はどうなっているでしょうか。中国のマスメディアと知識人の関係です。

(孫歌) マスメディアは思想を生産しません。しかし思想を消費していると思えます。思想の生産者は、もし理想状態でいえば、いわゆる知識人です。知識人とは大学人とは限りません。要するに物事をそのまま現象面で処理しないで、考える人間ですね。考えて発言して、マスメディアはその場を提供します。中国の場合では、基本的な状況は似ています。ただし、日本のメディアでよく言われた言論の自由の問題がありまして、ですから出そうとした言論自体はチェックさ

れるというところがあります。中国のメディアにとって、中国の言論の自由の問題そのものは、もし段階に分けて考えれば、文革が終わるまでに基本的にイデオロギー統制が社会の政治システムに直接に繋がりました。イデオロギー管理自体は実質的なことでした。しかし、市場経済化以後、いわゆる改革開放以後に、イデオロギー統制自体は空洞化してしまいました。ですから、今のいわゆる言論の自由の問題は、政治的な問題というより、むしろ官僚主義の問題です。いわゆる言論統制の大半は、官僚たちは恠性的にそれをやっています、自分のイスを保とうとするということなのです。ですから、中国のメディアにとつて一番深刻な問題は、言論が自由かどうかではなく、メディアを支えている人たちの頭の質の問題です。中国のメディアの圧力は外在的なものですので、たとえば共産党の機関紙、あるいは政府の機関紙はとどきその立場からはまったく考えられないような、ラジカルな言論を堂々と出してしまふ。それはしばしばある現象です。その現象は何を意味するかというと、今外在的な制約はあるパターンでやっています、そのパターンからはみ出した言論は、意外にもコントロールされにくい。たとえば今、地震の時にそのラディカルな言論は実は出せるようになります。そうではないいわゆる正常な時期に、もつといろいろなところで管理はゆるんでいて、思考を伝える空間が作れないわけではありません。残念ながら、この時に出された言論自体は、ラディカルはラディカルですけれども、ほとんどはあまり良質な思想性を含むものではありません。そこで私たちは、私も含めて自分の責任を感じて

おります。もしメディアのがよくなければ、それは新聞記者の責任ではないのです。彼らは毎日、分厚い新聞紙を作って活字で全部埋めなければなりません。だから考える余裕がないです。われわれは代わりに考えなければなりません。しかし新聞紙で登場するいわゆる知識人の言論を見れば、それほど考えているとはいえません。むしろ、マスメディアの短絡的な発想に回収されて、発見の目を持っていません。それは大学に勤めている研究者の責任だと思います。特に、思想史研究者の責任です。ですから、私たちが丸山に対して興味を覚えたのは、ある意味ではそういう責任感から出てきたニーズでもあります。

——率直なご質問を一つさせていただきたいと思います。丸山眞男にしろ政治にしろ思想にしろ、いろいろな学者がいろいろな説を出しています、丸山自身も日本の思想だけではなく外国、ヨーロッパが多いのですが、粹にとらわれず、かなりいろいろなところからテーマを取り出して議論されていると思うのです。孫歌先生の論文を最近何本か見せていただいて、わかりにくいところがあつてご質問したいのですが、「アジアという思考空間」ということをおっしゃってまして、特にアフリカとかヨーロッパを切り離して、アジアという粹の中でどういうことを思考するかというようなテーマをお出しになつていらっしゃるかと思いますが、その意図がちよつと私にはよくつかめず、またジレンマということばも出てくるのですが、ジレンマとアジアという思考空間ということばでどのようなことをご考えになつていらつしやるの

か、その辺を教えていただけるとありがたいです。

（孫歌）たしかに、ジレンマということばの使い方は丸山から学びました。つまり、一つの現象に対して、彼はつねにこの現象の正面と反面を見て、そして正面と反面は分けて考えられないというような、複雑な、ある意味では解決の道がないような問題をあつかつております。丸山の場合には、政治思想史研究者ですので、彼はなるべく論理的に分析可能なところまでそのジレンマを進ませます。けれども、ギリギリのところまで行けば、彼は結局その完全な解説ということをお断じます。つまり、その解決自体は偽りになりますので。ですから、もつともおそらく顕著な彼の分析は、「現代における人間と政治」という一九六一年に書かれた論文の最後のところですよ。そういう意味において、私はまったく同じような立場でアジアという思考空間を見ております。ここであえて「思考空間」ということを強調したのは、地理的な空間からなるべくそれを区別しようとしたいわけです。地理的な空間でしたら、この空間は物理的に固定化されています。ある意味では私たちアジアの人々にとってこの物理的な存在自体は非常に重要な要素で、否定できません。しかし、たとえば丸山の強調した媒介される現実を見る場合には、そのままこの物理的な空間を受けとめることは、思想にとつては不十分なことになってしまいます。そういう意味で、思想空間として違う位相を作り出したいと思えます。それは決してアジアという実際の存在から遊離するわけではないです。しか

し、思考空間として強調する場合には、おそらく意味が変わります。まず、アジア人の独占できるような空間ではない。世界中のどの人たちもこの空間を共有しようとすれば平等に共有できる。これが前提になります。しかし、これはあくまでも理想状態です。実際には、アジア人のアジア観と先進国、特に欧米諸国の中で、アジアに対する態度とは決して同じではありません。そこで現実の位相での落差ができてしまいます。そして私たちが一口で「アジア人」とか「欧米人」といっても状況に合わないのです。その中にもさまざまな立場があります。アジア出身ですが、考え方は欧米人以上に「欧米的」になることも可能ですし、逆の場合に、欧米人でありながら価値観ともの見方はアジア的というのもありうる。そういう意味で、このアジアという思考空間は、機能として普遍化できるのではないかと私は思います。人類の立場に立って考える場合に、思想空間としてのアジアはやはり根本的にいままでの世界理解を正します。たとえば、普遍性についての理解をヨーロッパ基準で考えないで、ヨーロッパをもアジアと同じように、特殊な存在として理解して、もろもろの特殊性の間に存在している普遍性のあり方を考え直すこと。これはアジアを思想空間として定着させなければ出てこない課題だと思います。

その一方、もう一つの問題もあります。これは正面からアジアという語りは非常に重要性をもってはいるけれども、と同時に私たちはつねに自分のアジア性を忘れなければならないという、ある逆説のようなこともあります。そうすればジレンマが生じるのです。つまり、ア

ジアを強調することによって私たちは排他的になり、アジア以外の人は全部文化帝国主義者とか、あるいは人種的に一部の人たちを斥けるという可能性も生じるわけです。それを、アジアを語ることによって防止できるような語り方、あるいは思考パターンは、今のアジアの語りの中でおそらくまだできていないのではないかと。そういう意味で、私はジレンマを強調しました。それはやや分かりにくいというのは、自分の考え方が行くべきところに行っていない証拠です。これからがんばります。

——大変幼稚な質問をさせていただきます。実は私が丸山眞男を読みましたのは、一九四五年から一九五〇年ぐらまでの、敗戦直後のちょうど中学の四、五年から高等学校時代です。『世界』に丸山眞男の論文がよく出ておりました、それを何かむさぼるように読んだ記憶が残っております。何を読んだかはもう忘れませんでした。あの頃は、自分が理解できないのに何か惹かれるものがあったのだと思います。もう半世紀以上たつて、今日先生のお話を聞いて、そうだったのかという感じを私はもちまして、何か青春時代を思い出し、そしてやはり丸山眞男を読んだことは間違いではなかったという感じをもちました。先生に質問を一つしたいのですが、先生が丸山眞男を通じて丸山眞男的な政治に対するものの考え方、解釈、分析をされて、いま学問をされているわけです。それで、中国社会で発言されるわけです。そういった考え方なり行為なりに対して、中国一般なり中国政府の圧力はある

のかないのか、どの程度なのか、もしできれば差しつかえない範囲でお話しいただけませんでしょうか。

（孫歌） たしか去年あたりだと思えますけれども、ある市民グループから、市民講座をやってくれないかと連絡がありました。実はそのグループとは二〇〇五年の反日デモの時に接したことがありまして、その時に私は、日本は複数な存在で、単純な反日は政治的な判断ではないという話をして、途中で追い出されました。その彼らからは、もう一度日本について話をしてくださいと連絡がありました。そこで私があえて出したのは、「政治とは何か」というテーマです。そして彼らはすばやくインターネットでこのテーマを公表したのです。つまり、社会的に知らせたわけです。もし圧力を受けるとすれば、これは十分に条件がそろっていたのです。しかし、私はスムーズに自分の考え通りにこの講演を終わらせました。その主要な中身は、丸山の政治についての考え方を分析・引用しながら、普通の中国人にとっての政治的な行為とは何なのか、私たちはいかに政治参加ができるかというものでした。そして、この講演自体は録音されまして、動画で出したようですけれども、私の目を通していませんでした。その後、連絡はなかったのです。というわけで、圧力はございませんでした。

—— 今日のお話しにも通じるのですが、先生が日本思想史を学ばれようとしたきっかけ、それから吉林省の長春にお生まれになって、自分

の人生において日本にアプローチするとか日本の特に政治の思想史に興味をもたれた一番のきっかけは何だったのでしょうか。

（孫歌） おそらくこの二つのご質問には、順序を変えないとうまく答えられないです。まず、どうして日本に対して興味をもったかということですが、私はたしかに昔のいわゆる新京という旧満州国の首都で生まれました。そして大学時代も長春で過ごしまして、その時の専門は中国文学でした。私のその時の理想は、作家になろうとしたのです。卒業論文は魯迅の『阿Q正伝』です。そして大学を卒業したときにやっと分かったのは、私には作家の才能は足りないという悲しい現実です。それにしても、その時に日本研究をやりたいという気持ちはありませんでした。日本語もちょっとだけその時勉強したことはありますけれども、ほとんど使えない程度です。その後、一九八二年に北京の中国社会科学院に就職しまして、その間に仕事上で日本語を勉強する必要が生じ、一種の夜間大学のような中国社会科学院内部の日本語クラスに入りまして、週に二回、二晩のような形で日本語を勉強し続けました。それにしても、自分は日本研究をしたいとは思いませんでした。そしてきっかけになったのは、当時の私の上司に当たった先生です。この先生はすでに定年になっていますが、彼女は私の仕事ぶりを見て、あなたはもうそろそろ日本に行くべきだと言いました。彼女が手配して、私を日本に送ったのです。私は反発して、なぜ日本に行かなければならないかと言いながら、東京に来ました。その時に入った

のは、東京大学文学部の中文室でした。今日ここにいらっしやる下出鉄男さんはその時の知り合いです。なぜ日本思想史に興味を覚えたかといいますと、おそらくこれは中国の一九八〇年代以降の発展ともかわっておりまして。最初に日本に来たときに、ずっと中国文学、あるいは日本文学、要するに文学の範囲の中で仕事をしたかったです。

しかし、あれだけ激しく変動している中国社会を見て、自分の仕事はいったいどういう意味をもつかということをおぼろげに疑うようになりました。要するに、自分はあまり優秀な中国文学研究者ではなかったからで、優秀な方は実は非常に優れた業績をあげましたけれども、私は途中からモチベーションを失ってしまいました。そこで、できれば日本人はどのように自分の歴史と現状を見ているかということを知りたいと思ひ、それで転々とまわって結局日本政治思想史のところへ飛びついたわけです。だいたいこれは第二の問題に当たる答えです。

——私は丸山先生の弟子ではないのですが、先生が教えておられる頃に大学におりました、個人的にも存じ上げておられるのですが、私は全然学問の世界にいるものではないのですけれど、私どもの世代の人はたいてい丸山先生を読んでいるわけです。今の日本の若い人が読んでいるかどうか非常に疑問なのですが。今日ここに来ておられる年齢層から見ても。しかし、先生のお話をうかがって、丸山先生の本の読書会をされていることに非常に力づけられたのですが、そういうところに出られて丸山先生を学ばれた中国の方で、学会を乗り越えて、たとえ

ば政府とか、共産党とか、あるいは経済界とか、現実のところ働いている方はおられますか。やはり、丸山先生は中国の学界の中で知られるだけなのでしょう。それとも、それ以上に伝わっているのでしょうか。

（孫歌）丸山の影響はおそらく、これからだと思います。私たちの読書会は、基本的に学問の世界の中で丸山を研究している、いや研究するとはいえないです。それは研究としてまだ合格できません。つまり、丸山をきっかけに政治的に考えようとする。これはごくごく最初の一步だと思ひます。それにしても、その中に今までに一人、農村調査をやっている、実際の仕事をこなしている方がいます。彼ははやや異質な存在です。そしてある日、彼からこう言われました。「孫歌さん、僕はついこの間、ボランティアの会議で政治とは何かという話をしました」。つまり、彼はある意味では社会活動の中でなるべく丸山をいかそうとしたわけです。私はある危険性を感じました。それで、強く注意しました。われわれが今までに読んできた丸山の論点はごく一部ではないし、議論は十分に成熟していない。功利主義的に使っていないよと。これは丸山の一番反対するやり方です。だから、もしどうしてもやろうとするならば、丸山の名前を出さないでほしいと提案をしたのです。もちろん、おそらく丸山を勉強して中国をリードするような政治家は今までにいなかったし、これからのいないだろうと思ひます。丸山もそういうことを狙っていないはずなのです。むしろ、

一つの社会の政治的な成熟度は普通の国民の政治的なレベルによって決まるわけですから、われわれの仕事は、丸山のような政治的な思考をきっかけに、あるいは媒介に、自分なりの政治的な思考を成熟させ、そしてなるべく社会にアピールすることです。それはそれほど樂觀的な仕事ではありません。いま、啓蒙の時代はもうとっくに終わりました。大衆社会の中で思考停止自体はどの国でも基本的な事実なのです。それにもかかわらず、あえて政治的な声を出します。そしてそれは実用主義の政治的な声ではなくて、思想的な政治的な声を出すことによつてこの社会の質を多少でも良くすれば、私たちの努力は無駄ではないだろうと思います。

第10回 丸山眞男文庫記念講演会

# 丸山眞男を 中国で読む

講師：孫歌氏（中国社会科学院教授 一橋大学客員教授）

日時：2008年6月6日（金）15:00～16:30（開場 14:30）

会場：東京女子大学 2102教室（予定）

東京都杉並区善福寺2-6-1（JR西荻窪駅北口より徒歩12分。バスの場合は西荻窪駅北口より吉祥寺駅行き東京女子大前下車）

---

申込不要・入場無料

---

【講師プロフィール】 孫歌（SUN-GUU）氏

1955年中国吉林省長春生まれ。中国文学、日本思想史の研究者。政治学博士（東京都立大学法学部）取得後、東京外国語大学地域文化研究客員教授、ドイツハイデルベルク大学中国学科、日本学科客員教授、アメリカワシントン大学東アジア学部客員教授などを歴任。現在、一橋大学社会学研究科客員教授（2008年9月まで）。主な著書は、「アジアを語ることのジレンマ—知の共同空間を求めて」（岩波書店 2002）、「竹内好という問い」（岩波書店 2005）など。なお、丸山眞男に関する論文は、「丸山眞男におけるフィクションの視座」（「思想」1998年6月号）、「丸山眞男における政治」（「思想」2006年8月号）がある。

【丸山眞男文庫とは】

日本政治思想史の研究を中心に、政治思想家として世界に向けて発信し続けた丸山眞男は、戦後の日本を代表する知識人でありましたが、その思索の跡を伝える約二万冊の蔵書と約三万頁の手稿類が1998年に東京女子大学へ寄贈されました。東京女子大学は、日本における丸山眞男研究の拠点となり貴重な資料がひろく活用されることを願って丸山眞男文庫を設立し、調査と整理を進めるとともに講演会等を開催しています。

【問合せ先】 東京女子大学 教育研究支援課 TEL 03-5382-6454

<http://www.twcu.ac.jp/>

# 第一〇回丸山眞男文庫記念講演会についての感想（抜粋）

・とても理論的なお話で論文を読んでいるようでした。中国の辿ってきた道を見ることで、日本のこともよくわかりました。比較するとよくわかること、外を見なければ自分（日本）のこともわからないと思いました。（二〇代・女性）

・学生の読書会での経験から現代の中国における問題を構造的に考察する過程をお話しされたことが、丸山眞男を身近に感じさせてくれた。（三〇代・女性）

・日本のアカデミズムの世界では、近年、皮相的な丸山批判が横行しているように見受けられますが、その一方、今、中国でそのような読み方がなされていることを知り、感銘を受けました。（四〇代・女性）

・中国においての丸山眞男の読書会を知り嬉しく思いました。孫歌先生も本当に力強く、中国の実態を少し知ることが出来ました。（六〇代・女性）

・中国において丸山眞男の思想を研究されている人が存在していることは新しい発見でした。今後の動向がどうなるか関心の一つです。

（七〇代以上・男性）

・丸山が今日においても読まれていることの意味、また中国において

も読まれている背景が良く理解できた。（六〇代・男性）

・ギョウザ、カルフルデモ、四川省地震などについて、中国の知識人の分析を聞くことができて面白かった。（四〇代・女性）

・本来インターナショナルな性格に富んでいる丸山眞男さんの発想が現代中国の光と影を照らし出していくさまを描いていただいととも興味深く拝聴しました。（七〇代以上・男性）

・丸山の視座が中国近代化の思想的示唆を与えるという点、面白く拝聴いたしました。（七〇代以上・男性）

・現代中国の「政治学」の応用とどうか現実論として興味あるテーマであったと思います。（五〇代・男性）

・非常に興味深く聞きました。中国と日本のより深い理解につながりそうな気がいたします。（五〇代・女性）

・明快でメリハリのあるとてもよい講演でした。講演の中での「ギョウザ問題、チベット問題、四川地震を丸山を通して探る」などの発言には、ドキリとさせられました。ロシアVS中国：先生の一九四九年以降の中国の歴史見解は参考になりました。（六〇代・男性）

・孫歌氏の話を通して中国の知的状況を知り得て、大変興味深く新鮮でした。孫歌氏の言葉の選択に感銘を受けました。それは孫歌氏の

丸山理解、政治社会の把握の正確さ深さのあらわれだと思えます。

(六〇代・女性)

・現代の中国で丸山眞男がどのように読まれ、受け止められているのか非常に興味をもち参加しました。お話は分かりやすく、現代の中国の状況をお話なさる中で、自分の問題として考えておられることに共感を持ちました。ありがとうございます。(六〇代・女性)

・孫歌氏の丸山眞男についての真摯な研究、著作の深い読み込みに感じ入りました。また、丸山を通して、祖国、中国の現実とあるべき未来を考えると、丸山の姿勢に感銘を受けると同時に、丸山眞男の思想の偉大さに思いを馳せた次第です。(七〇代・女性)